

# 1930年前後の日本の少年団とシャムのルークスアの相互訪問

圓 入 智 仁

## Mutual Visits of Boy Scouts in Japan and Siam around 1930

Tomohito Ennyu

(2015年11月27日受理)

### 1. はじめに

1929(昭和4)年7月28日から8月12日にかけて、シャム(現在のタイ、漢字表記で「暹羅」)のボーイスカウト(現地語で「ルークスア」、「虎の子」の意味。以下、「ルークスア」と表記)の一行が来日した。7月28日に神戸港に到着し、大阪、奈良、京都、名古屋を経て東京に至り、日本のボーイスカウト(当時は「少年団」、以下、「少年団」と表記)のキャンプに参加した後、8月1日に横浜港を出港して帰国の途に就いた。

その1年半後の1931(昭和6)年1月3日、日本の少年団一行がバンコクに到着し、当地におけるルークスアの「ジャンボリー」(ボーイスカウトの野営集会を表す言葉)に参加した。その後、アユタヤなどの観光を経て、1月15日にシャムを鉄道で出国し、シンガポールから船で日本に向かった。

本稿は、いずれも英国が発祥の地であるボーイスカウトに由来する戦前の日本の少年団とシャムのルークスアが、相互に訪問、交流したことに着目し、その目的や経緯、そして訪問者による感想を検討する。これらにより、相互訪問における招待者の思惑と、訪問者の受け止め方が明らかになる。

本研究で主に使用する史料は以下の通りである。まず、日本語の史料としては、少年団日本連盟の機関誌『少年団研究』や、戦前期「外務省記録」(外務省外交資料館、一部はアジア歴史資料センターでデータベース化されている)などである。次に、タイ語の史料としては、ルークスアの機関誌『ルークスア』、シャム教員協会の雑誌『ウィッターチャー』の他、いずれもタイ国立公文書館にある「7世王文書」(脚注において「Roo 7」と表記)、「外務省文書」(同様に「Koo Too.」と表記)、「文部省文書」(同様に「Soo Thoo.」と表記)である。

戦前の少年団が外国のボーイスカウトを受け入れた経

験は、日本の影響下にあった満州の「童子軍」の他には<sup>1)</sup>、東南アジアのシャムと、米国からの派遣団に限られていた<sup>2)</sup>。本稿で扱う1929(昭和4)年のシャムからの受け入れは、米国のボーイスカウトの受け入れと同時期だった。

本稿で扱う日本とシャムの少年たちの相互訪問については、少年団史や、日タイ交流史に位置づけることができる。少年団に関する代表的な先行研究として、上平泰博ら『少年団の歴史』(萌文社、1996年)や田中治彦『少年団運動の成立と展開』(九州大学出版会、1999年)がある。しかし、本稿で扱う少年団とルークスアの交流はほとんど触れていない。

海洋少年団の歴史研究である圓入智仁『海洋少年団の組織と活動』(九州大学出版会、2011年)は、海洋少年団の練習船が1934(昭和9)年にシャムに寄港してルークスアと交流したこと、その練習船をシャムに譲渡する問題を扱っている。さらに圓入は、1930(昭和5)年にルークスアが少年団に対して2頭の象を寄贈した経緯を検討している<sup>3)</sup>。これらの研究においても、ルークスアと少年団の交流の発端は明らかにされていない。

また、日本とシャムの交流史としては、既に多くの研究蓄積がある<sup>4)</sup>。例えば西野は、1928(昭和3)年から1936(昭和11)年まで在シャム日本大使を務めた矢田部保吉の業績に、両国のボーイスカウトの交流があることを指摘しているが<sup>5)</sup>、その詳細には触れていない。

### 2. ルークスアを日本に招待した経緯

1929(昭和4)年2月27日、在京暹羅公使館は少年団日本連盟に、シャムのルークスアが発行した仏歴2468年(西暦1925年)の年次報告書3冊を贈った<sup>6)</sup>。それに対して、少年団日本連盟は同年3月4日、理事長二荒芳徳と理事三島通陽の名前で礼状を公使館に渡し

た<sup>7)</sup>。この時のことと思われるが、在京暹羅公使館を訪問した少年団日本連盟関係者が、シャムのルークスアの1隊を、費用の全額を含めて日本側が招待するとの打診をした。公使館は3月6日付けで本国にこのことを報告した<sup>8)</sup>。3月27日、シャム文部省の一部局であるルークスア・シャム連盟は、中央管理委員会副委員長の名前で在京暹羅公使館に対し、日本にルークスアを派遣するメリットは大きく、ルークスアの総長を務める7世王にも、この件について報告済みであるとの公文書を発した<sup>9)</sup>。その3日前の3月24日、少年団関係者2名が在京暹羅公使館を訪問し、12歳から17歳のルークスア20名を12日間、日本に招待することを、旅程を含めて相談していた<sup>10)</sup>。

少年団日本連盟は既に、4月9日付で理事長二荒芳徳を発信者として、正式にルークスアに招待状を発していた。これには「少年団日本連盟は日本暹羅協会、日本の二大新聞たる東京日日新聞及大阪毎日新聞の充分なる援助により暹羅少年団隊長及指導者を含み二十名(十二歳より十七歳まで)を日本に招待する」とある<sup>11)</sup>。また、「バンコックより日本まで及日本内地の旅行に要する経費全部」を「我等」で負担するとし、招待の目的については、「少年団の影響を協力して日暹両国に拡張すること」と、「日暹両国の少年に親交の機会を与ふる」ことを掲げ、「訪問の大部分は観光と大都市訪問と名所で共に野営する」としている。この訪問により、「暹羅少年団と日本少年団と一層親密な連繋を作つて相互の友誼と諒解とを増進することを望む」としている。少年団とルークスアの交歓を両国の親善友好に発展させることと、国内観光、野営を目的としていた。

シャムの指導者と少年ら20名を招待する経費の負担者は、大倉財閥の総帥、大倉喜七郎男爵であった。彼は暹羅協会を創設し理事長を務めていた人物である。「名目上招待者は日本少年団、宣伝方面は大毎、東日の両新聞社が当たることに定められたが、その蔭にあつて招待費用万端、協会理事長の資格で大倉男爵が負担された」という。ただし、「この事は当時男爵から口止めされてゐた」ようであるが<sup>12)</sup>、その理由は不詳である<sup>13)</sup>。なお、ルークスアの招待にかかる費用は、5,000円であった<sup>14)</sup>。

暹羅協会は、1927(昭和2)年12月に任意団体として設立され、日本とシャムの友好親善団体としての活動を始めた。設立に当たっては大倉喜七郎による「多大な尽力」があり、「設立後も協会活動が軌道に乗るまでは、大倉男の多額な個人的資金援助」があった<sup>15)</sup>。大倉は英国留学経験があり、ケンブリッジ大学などでシャムからの留学生と知り合ったことがシャムの王室と交流するきっかけになったと考えられる。

暹羅協会の嘱託職員でシャム語を解する大山周三は、今回の招待の目的を「日暹少年団の親善」とした。具体的には、シャムのルークスアが「帰国後土産話となり母国に求め難き地理風俗の見学を希望」しているとして、訪日の際には、「建築、施設及観覧物等」、「(関東大震災後の一引用者)帝都復興の驚異すべき有様」、「人、車、雑沓の巷(繁華の街路)」などの見学を提案した<sup>16)</sup>。さらに大山は、シャム人を日本の寺院を参詣させる案について、両国の寺院と僧侶の風習が異なることを指摘し、シャム人は興味を持たないと言う。それよりも、「日本の文化が僅か五六十年にして斯の如き歐洲先進国を凌ぐ程の地位を保ち得た」ことをルークスアに示すべきと主張した。

在バンコクの日本公使館が見たであろう当地の英字新聞「デイリーメール」紙は、同年6月1日付けの記事でルークスアが日本に招待されたことを好意的に受け止めており、他国からの招待や自国への招待も期待するとしていた<sup>17)</sup>。また、6月24日に在バンコクの日本公使がシャムの文部大臣とティーパーティーで会見した際、同文部大臣から、同国工芸学校の校長、ルワン・サナーポッチャナパーク(欽賜名。シャムへの帰国後、位階勲等が「ルワン」から「プラ」になった。)を派遣団団長として同行させ、派遣団の日本訪問終了後は彼を1人だけ残して職業教育を視察させたいこと、彼の渡航費用と日本滞在費用は全てシャム側で負担することが伝えられた<sup>18)</sup>。これにより、派遣団はルワン・サナーポッチャナパーク他指導者2名、少年18名の、計21名になった。少年の名簿は7月9日の時点で、首都クルンテープ州から15名(12歳1名、13歳1名、14歳3名、15歳2名、16歳8名)、北部のパヤーップ州から2名(両名とも16歳)、南部のナコーンシータンマラート州から1名(16歳)であった<sup>19)</sup>。

シャムからの派遣団は7月3日にバンコクに集合し、出発前の訓練を受けた。キャンプ、寺院参拝、日本公使館訪問などのプログラムをこなした。同月13日にバンコクを出発し、シンガポールを目指した<sup>20)</sup>。彼らと在留日本人会、在バンコク日本公使館はこの訓練中に「茶会」で交流し、シャムの文部大臣も在留日本人をワチラーウット学校に招待してシャムの文化や訪日ルークスアの訓練の様子を見学させた。この時、文部大臣は、シャムの国王が「今回ノ本邦少年団ノ招待ヲ大ニ徳トセラレ明年ハ一、二月ノ交恰モ暹羅国ニ於テ少年団ノJamboreeヲ盤谷ニ開催スル年ナレハ其ノ機会ニ本邦少年団ヲ暹羅国ニ招待スヘシト仰セラレタル」ことを、公使館に伝えた<sup>21)</sup>。

### 3. 少年団をシャムに招待した経緯

既に5月20日には、7月12日に開催される7世王の最高顧問会議において、日本によるルークスアの招待に応えるため、仏歴2473年（西暦1930年であるが、当時のシャムの暦は4月始まりであった）に、日本の少年団をシャムに招待すると決めることになっていた<sup>22)</sup>。これは、日本がルークスアを招待する主な目的としての、相互の親善という目的を踏襲したのに加えて、1931年1月（仏歴2473年1月）に開催される予定の、ルークスアの全国大会に参加させることも目的としていた。招待にかかる予算は5,000バーツであった。1929年7月27日のバンコクにおけるレートでは、100チカル（バーツ）が103円であり<sup>23)</sup>、日本側の記録には、1930（昭和5）年度に4,500円を受け入れたことになっている<sup>24)</sup>。7月9日付けでシャムの文部省は大倉に手紙を送り、今回の訪日が両国のルークスア（少年団）の友好関係を強化することになると伝えるとともに、シャムとして、日本の少年団をシャムで開催するジャンボリーに招待することを考えていると伝えてきた<sup>25)</sup>。7月12日の最高顧問会議において5,000バーツは仏歴2473年に王庫から支出することを決定した<sup>26)</sup>。

シャムからの正式な招待状は、1930（昭和5）年5月26日に送付され、バンコクの日本公使館、日本の外務省を経由して、少年団日本連盟の理事長二荒芳徳に届けられた<sup>27)</sup>。ここには、先の訪日を踏まえ、招待の目的としてルークスアと少年団の「相互交歓か両国々交親善の増進に資する」ことと、ルークスアの「ナショナル、ジヤムボリー」への参加が記されていた。連盟理事会で協議の後、9月16日に日本の外務省に対して少年団員を派遣する旨を回答し、さらに10月10日には同じく外務省に対して「訪問地方の衛生状態を承知し予防すべ事項ありや例へば天然痘、赤痢、風土病等」、あるいはバンコクの日本公使館が医師の世話をしてくれるのか、さらにはシャム滞在中の野営道具の必要性について問い合わせをしている<sup>28)</sup>。熱帯のシャムに関する情報は、日本ではまだほとんど入手できなかったであろう。このことについてバンコクの日本公使館は、外務省に対しシャムの気候、衛生状態（衛生設備、流行病の状態）、携行品に関する事についての回答をしており、それが少年団日本連盟にも手交された<sup>29)</sup>。

シャムへの派遣団は当初、団長に連盟理事長の二荒芳徳、指導者として連盟から2名、東京と大阪の少年団指導者各1名の、都合5名が引率することになり、少年団員としては、14歳から17歳の14名が選ばれた。それぞれ、東京をはじめ栃木的那須野や日光、神奈川の横浜や横須賀、静岡、名古屋、京都、大阪、神戸、そして台湾

の少年団員であった。後に、指導者1名と少年団員2名が加わっている。これらの派遣団員の一部は11月21日から25日まで東京で訓練を受けた後、12月16日に東京駅を出発し、17日に伊勢に至って、ここで派遣団全員が集合した。伊勢神宮などを参拝した後、18日に神戸を出港してシンガポールに向かい、そこから鉄道でシャムを目指した。

### 4. 相互訪問の経過

シャムから来日したルークスア一行は、1929（昭和4）年7月28日に神戸港に到着し、市内を観光した。30日に大阪に電車で移動し、翌日にかけて工場見学などをした。8月1日には船で大阪南部の浜寺海水浴場に行き泳いだ後、大阪から奈良に移動した。これ以降の都市間の移動は鉄道を利用した。2日は奈良観光の後、京都に移動して4日まで滞在した。5日には名古屋に移動して、翌6日にかけて市内観光や鶴飼いの見物などをして過ごした。同日の夜行列車で東京に向かい、7日に到着した。官公庁への表敬訪問や、少年団のキャンプ訪問などで過ごした。9日には山梨で開催中の東京連合少年団キャンプに1泊だけ参加し、ここで秩父宮雍仁親王に面会し、10日には東京に戻った。11日は横須賀の海軍の艦船を見学した。12日には横浜港から船に乗って帰国の途に就いた。途中、13日に神戸に寄港し、荒天のため16日まで出航が延期されたので、神戸や阪神間を観光した。17日には門司に寄港し、離日した<sup>30)</sup>。

1930（昭和5）年12月18日に神戸港を出発した少年団の、シャムにおける行動記録は次の通りであった。シンガポールに入港後はマレー半島を列車で移動し、1931（昭和6）年1月2日に汽車でシャムに入国した。3日にバンコクに到着し、すでに開催されていたジャンボリーの会場に入った。キャンプをしながらルークスア関係者や王族などの面会と市内観光を7日まで続けた。8日に汽車でアユタヤを経由してロップリーを訪れて、観光した。翌9日にアユタヤに移動し、寺院や旧跡などを観光した後、バンコクに船で移動した。10日は船からバンコクを観光し、王族などの饗応を受けた。11日と12日はバンコク市内を観光。13日はバンコクを出発して南に向かった。その途中、ナコンパトムに移動して寺院などを観光し、汽車でペッチャブリーに移動した。14日はペッチャブリーを観光した後、汽車でさらに南下してシャムを出国した<sup>31)</sup>。

### 5. 相互訪問場所の比較

以上の相互訪問について、どこを訪問したのか、比較

しながら検討したい。そのため、少年団日本連盟によるルークスアの訪日記録と、シャムのルークスアによる少年団の訪シャム記録に基づき、両者それぞれの訪問場所を分類した。表1と表2の通りである<sup>32)</sup>。相互の訪問

先を比較すると、以下の特徴が浮かび上がる。ここでは示さなかったが、ルークスアも少年団も、列車の通過地や訪問地において、地元の子どもたちから歓迎されたことが記録に残っている。

表1 日本におけるルークスアとシャムにおける少年団の訪問場所比較(1)

ルークスア			少年団	
訪問場所	主な面会相手		訪問場所	主な面会相手
川崎造船所(神戸)	社長など	工場	プーンセメントタイ(バンコク)	
内外ゴム会社(神戸)			中央鉄道部の工場(バンコク)	
造幣局(大阪)				
鐘紡淀川工場(大阪)				
王子製紙都島工場(大阪)				
島津製作所(京都)				
日本陶器株式会社(名古屋)				
大阪毎日新聞(大阪)		情報通信施設		
大阪朝日新聞(大阪)				
中央電信局(大阪)				
中央電話局(大阪)				
東京日日新聞(東京)	午餐会で社長、文部政務次官、外務政務次官、暹羅公使館書記官など			
中央放送局(東京)				
大阪毎日新聞門司支局(門司)				
商工会議所(神戸、大阪、名古屋、東京)		商業施設		
大丸呉服店(大阪)				
松坂屋(名古屋)				
上野松坂屋(東京)				
神戸海洋気象台(神戸)				
暹羅名誉領事(大阪)		官公庁等 地方自治体は除く	日本公使館(バンコク)	
文部大臣官邸(東京)	小橋文部大臣		アルンコット(陸軍参謀)邸(バンコク)	
外務大臣官邸(東京)	幣原外務大臣		教員協会(バンコク)	
暹羅公使館(東京)			スワンクラブ学校(キャンプファイヤー、バンコク)	
			ア Nilott Tee-ware (一等宮内官)邸(コーンとラコーン観劇、バンコク)	国王
		プラバトムウィッタヤーライ学校(ナコーンパトム)		
日暹貿易協会(大阪、商工会議所で晩餐会)		日本・暹羅 関係機関		
暹羅協会(東京、集古館邸で茶話会)	近衛文麿・会長、大倉喜七郎・理事長など			
第四師団(大阪)	師団長	軍事施設		
追浜航空隊(水上飛行機・飛行艇、横須賀)				
第五潜水艦(横須賀)				
戦艦長門(横須賀)				
水交社(横須賀)				
記念艦三笠(横須賀)				
楠公神社(神戸)		宗教施設 施設での茶話会などは除く	王宮寺院(バンコク)	国王、王妃
住吉神社(大阪)			ワット・テープシリン・タラーワート(バンコク)	
春日神社(奈良)			ワット・ベンチャマボピット(大理石寺院、バンコク)	
東大寺三月堂・大仏殿(奈良)			ワット・ポー(涅槃寺、バンコク)	
西本願寺(京都)			ワット・サケート(親闍式、バンコク)	国王、王妃
平安神宮(京都)			ワット・プラ・シーサンベット(アユタヤ)	
清水寺(京都)			ヴィハーン・プラ・モンコン・ボピット(アユタヤ)	
三十三間堂(京都)			ワット・アルン(暁の寺、バンコク)	
東別院(真宗大谷派名古屋別院、名古屋)			ワット・カンラーナーナミット(バンコク)	
熱田神宮(名古屋)			プラ・バトム・チェディー(ナコーンパトム)	
覚王山日暹寺・仏骨奉安堂(名古屋)			ワット・プラ・プラトーン・チェディー(ナコーンパトム)	
明治神宮(東京)			ワット・プラノーン(ベッチャブリー)	
甲宗八幡宮(門司)				



表2 日本におけるルークスアとシャムにおける少年団の訪問場所比較（2）

ルークスア			少年団	
訪問場所	主な面会相手		訪問場所	主な面会相手
御所（車中見学、京都）		皇室（王室） 関連施設	五世王騎馬像（バンコク）	
二重橋前（東京）			ドゥシット宮殿（アナンタサマーコム宮殿、バンコク）	
秩父宮邸（東京）			チャンカセーム宮殿（アユタヤ）	
			クンシーアユッタヤー宮殿（アユタヤ）	
			バーンパイン宮殿（アユタヤ）	
			ウォラディート宮（？、バンコク）	ダムロン親王
			テーウェートウォンウィワット親王邸（バンコク）	
			サナム・チャン宮殿（サーマッキームックマート宮殿、ナコーンパトム）	
			ナコーン・キーリー宮殿（ペッチャブリー）	
			バーンブン宮殿（プララーム・ラーチャニウェート、ペッチャブリー）	
築港少年団幹部宅（分宿、大阪）		少年団・ ルークスア関係	サラーンルーム公園（ジャンボリー会場、キャンプファイヤー、ムエタイ、ボクシングなど、バンコク）	国王、ルークスア高官、同各州代表者
少年団日本連盟（文部省構内、東京）			ビピッサリー邸（宿泊、バンコク）	
故後藤新平（少年団日本連盟総長）の墓、後藤邸（東京）	後藤邸で後藤一蔵			
東京連合少年団「夏の村」（東京）				
東京連合少年団の野営（キャンプファイヤーなど、山梨）	秩父宮 雍仁親王、米国サクラメントのボーイスカウト			
二荒芳徳（少年団日本連盟理事長）邸（東京）				
温泉（神戸）		観光等	アヌサワリー・タハーンアーサー（志願兵の祈念碑、バンコク）	
摩耶山（神戸）			ミッサワカン公園（コーンを観劇、バンコク）	
心齋橋通、道頓堀（大阪）			ロップリー旧跡（ロップリー）	
大阪城（大阪）			ワチラーウット図書館（バンコク）	
浜寺海水浴場（大阪）			博物館（バンコク、アユタヤ）	
三笠山（奈良）			旧日本人町（バンコク）	
鹿寄せ（奈良）			ワチラーウット学校（宿泊、バンコク）	
動物園（京都）			サヌック公園（バンコク）	都長官
比叡山四明ヶ嶽（京都）			市内観光（バンコク）	
七本松プール（名古屋）			へび園（バンコク）	
鶴舞公園美術館・普選壇（名古屋）			山の洞穴（カオ・ルアン洞窟か、ペッチャブリー）	
名古屋離宮（名古屋城、車中見学、名古屋）				
日本ライン（木曾川下り）				
大倉喜七郎の集古館邸（東京）				
歌舞伎座（観劇、東京）				
甲子園（野球観戦、西宮）				
宝塚歌劇（観劇、宝塚）				
清瀧公園（門司）				

第一に、ルークスアには日本の工場、情報通信施設、商業施設、軍事施設を数多く訪問させているのに対し、少年団にはシャムの当該施設について2カ所だけ工場を訪問させていることである。また、ルークスアには日本とシャムの貿易や交流に関わる団体を訪問させている。その一方で、当時、既にシャムには両国の交流に関わる組織が存在していたのにも関わらず、少年団には訪問の機会がなかった。

第二に、宗教施設については日本側もシャム側も、その国を代表する所を訪問させていたことである。日本の

奈良や京都などの神社仏閣と、シャムのバンコクやアユタヤなどの寺院がその対象となっている。

第三に、皇室（王室）関連施設については、ルークスアには京都の御所、東京の二重橋、秩父宮邸だけを訪問させているのに対し、少年団にはバンコクやアユタヤなどの宮殿などを数多く訪問させていることである。

## 6. 日本を訪問したルークスアの感想

日本を訪問したルークスアの感想について、少年たち

の作文は発見できなかったが、引率者であるルワン・サナーポッチャナパークの文章を確認できた。ここでは、彼による日本の印象を記した報告文（雑誌『ルークスア・サヤーム』7(11), 仏歴2472（西暦1929）年11月に掲載、以下、『報告文』と表記）と<sup>33)</sup>、教員協会における講演の記録（シャム教員協会の雑誌『ウィッタヤーチャーン』30(8), 仏歴2473（西暦1930）年4月に掲載。これは彼の死後、葬式本として印刷された。以下、『講演記録』と表記）に依拠して検討する<sup>34)</sup>。

まず、ルワン・サナーポッチャナパークは『報告文』のまとめにおいて、今回の日本の少年団によるルークスアの招待には、以下の意図があったと指摘している。

- (1) 昔からの関係を回復するためであり、更に発展させる。子どもたちの間に友愛を植え付けることで、彼らは将来、心も考えも同じになる。そのことが、東洋において同等の大国に発展することを支えるのである。
- (2) 国の基礎を拡大し堅固にするために、シャム人をして関係作りと学習のために訪問することを熱望させたのであり、また、タイ国内で日本の製品が広く行き渡るように努力するためでもある。それにより、商売上の関係が都合良くもなる。
- (3) 仏教方面で関係作りをするためである。日本国内の仏教の地位を永続的に発展させるためである。

(1)において、日本とシャムの両国における歴史的な関係を意識しながら相互の友好関係の維持、そして将来における相互の発展に寄与するものとなること、(2)において、シャム国民を日本に招待することによって、日本の国情を理解させ、とりわけ日本製品の製造過程を見学させることによってそのシャム国内での普及を期待していること、そして(3)において、仏教における両国間の関係向上と日本国内における仏教の地位の持続を、それぞれ指摘している。以上を踏まえ、ルワン・サナーポッチャナパークは今回の訪日について、「特にルークスアに関することだけの行事ではなかった。双方の国民の間に関係に関することが本来の趣旨であった。さらに良かったことには、双方にとって有益であったことである。」と述べている。

このような報告は、日本側が意図していた日本とシャムの少年団（ルークスア）の親善のみならず、日本の地理風俗の見学、とりわけ建築、施設、観覧物、関東大震災の復興、そして人、車、雑踏の巷の見学を通して近代化を進めてきたことを示すということに、いくらか合致する点を見出すことができる。なお、先に引用した大山は、ルークスアを日本の寺院に連れて行って見学させる

ことについて、日本とシャムの仏教の違いから、「暹羅人は興味を持ってない」と否定的であったが、ルークスアはそれを肯定的に受け入れていたようである。

#### 6-1. 日本人に対する印象

ルワン・サナーポッチャナパークは日本人の印象を以下の通り述べている（『報告文』）。

ルークスアが日本を訪問したことについて、日本人にしてもらったことに満足している。彼らが信じていることによると、シャム人はとても親しい国民性で、次のことをよく言っていた。即ち、タイ人と日本人は体つきや特徴、立ち居振る舞い、態度が非常によく似ている。（中略）日本の新聞がニュースやタイ国のことを流したので、国民は前もって、ルークスアが日本国を訪問することを知っていた。（中略）お偉方の中には、タイ語を練習している人が多かった。関係の向上に寄与するものと思われる。日本のルークスアも、ずっと寝るまでの間、友人として接してくれた。親しい会話では、暹羅のルークスアは英語で話をしていて、そして、日本のルークスアと友人同士になると、ますますよく話ができるようになった。互いに話すことで、それほどよく理解し合えなかったが、理解し合えるように努力して、ふざけ笑い合うことで、とても親しくなった。

日本人の方から親しみを持ってルークスアを受け入れていたこと、また「お偉方」と表現した要人もシャムの言葉を使おうと努力していたこと、日本の少年団も英語でルークスアと会話し、相互理解の努力をしていたことが記されている。日本側の友好的な態度が十分に、ルークスアに伝わっていることが読み取れる。

また、日本人について、彼は次のようにも述べている（『報告文』）。

国民はどこでもぎゅうぎゅう詰めで、入り乱れている。家屋は丘や山の上にあることが多い。人民はそれぞれの地位にふさわしい教育を受け終えているようである。暹羅国内における「田舎者」というような人はいない。そもそも、都会であろうが郊外であろうが、ほとんど同じであり、都会の人の性格は女も男も礼儀正しく、個々人が組織の一員であるかのようなようである。誤解が元で諍いが起こることはほとんどなさそうである。

この他にも、土着の日本人は男女ともに着物を着用し

ているが、公務員などは洋装をしている人も多いこと、「客を尊敬し、熱心に良く歓迎してくれた」こと、「性格は温和で穏やかである」こと、さらには、一般家庭では「食事と睡眠を同じ部屋ですること、食事の際は個人に専用の器と食物が提供されること、「日本人は散歩が好きである」ことなどを記録している（『報告文』）。

ルワン・サナーポッチャナパークは大阪で少年団の指導者宅で宿泊した際、家に入る前に靴を脱ぐこと、家の中ではスリッパを履くが、浴室やトイレでは別のスリッパに履き替えること、シャムと同様に床に寝るが、部屋を開けるままにすること、居間は寝る場所や食事をする場所になること、床の間で客を迎えること、熱いお湯に入浴することはマッサージと同じ意味があることなどを報告している（『講演記録』）。

これらは日本側が期待していた日本人や日本文化に対する理解を深めるという意図に叶うものであるとみることができると。なかでも、宏大な平地が広がるシャムと違い、丘や山に家を建てることは驚きだったのであろう。

## 6-2. 日本の近代化

ルワン・サナーポッチャナパークは日本国内の製造業、農業、商業、宗教、通信、交通機関、都市生活について、「発展の程度は、他の大国と肩を並べている」と述べた上で、以下の通り報告している（『報告文』）。

様々な商品はほとんど全てのモノと種類が、市場で販売され流布している。巨大な工場があって、全ての業務、全てのモノ、全ての種類について日本人は自分たちで行うことができる。農業も全土にあって、空き地を見つけることが難しいくらいである。それは、丘や山といった、植えたり育てたりすることができない土地や、自然のままに残しておくべき所を除いてのことである。数々の遺跡や崇拜の場所を守ることを、日本人は熱心に取り組んでいる。いくつかの遺跡について、彼らは千年もの間、もともとの姿を維持していることもある。交通や通信について、あらゆる方角へあらゆる方法で連絡が取れるようになっている。電信、電話、ラジオは充足している。どの家にもラジオ受信機がある。汽車、電車、いろんな種類の搭乗できる自動車、人力車、どの方向にも、便利な交通手段がある。都会の人々はしょっちゅう雑然と入り乱れている。深夜には電灯が明々とともっている。彼らは、我々の王族の誕生日の時のように火をともしている。誰も電力を惜しいとは思っていない。尋ねてみると、火を灯す料金はとても安いのである。

日本製品など、外国からの輸入が多いシャムにとって、自国内で生産し消費している日本の状況は圧巻だったに違いない。他にも、遺跡の保存、交通通信網、電灯の普及など、やはり日本の近代化を目の当たりにした驚きが素直に記されている。

また、『講演記録』においてルワン・サナーポッチャナパークは、特に大阪の商業と工業に関して、次のように述べている。

大阪は商業上、最も大きく、最も美しく、そして最も重要な都市です。日本の中心だと言えます。その理由は、工場が数多くあるからです。（中略）大阪では1年間で9億円分もの商品を製造しています。（シャムは外国にお米を売っていますが、それは1年で約1億7,000万バーツです。）このような工場では、女性労働者が男性よりも多くなっています。（中略）工場で働く女性は、大抵、年齢が14歳から24歳です。1日あたり、9-10時間働かなければなりません。

続けて、これら女性労働者のために工場主は針仕事や家事を学ぶ学校や、保育施設を設置していると述べている。工場で使用する機械も日本国内で生産していること、工場が研究所を持っていることにも触れている。その他にも、北九州にある製鉄所には煙突が390本あり、4万人が働いているにおける工場に関する情報も記して、その規模を驚きと共に伝えている。

## 6-3. 仏教

仏教については、「土着の日本人は仏教と神道を信仰している。仏教はいくつかの宗派に分かれているが、全て、大乘仏教というつながりはある。中国のように、儀式はかなり緩んでいる。」と指摘している（『報告文』）。また、京都の三十三間堂には「仏像が33,333体ある」こと、名古屋の真宗大谷派名古屋別院では僧が妻帯できると知ったことを報告している（『講演記録』）。仏教の他にも、神道やキリスト教の信者がいると述べている。

## 7. シャムを訪問した少年団の感想

シャムを訪問した少年団の感想としては、指導者による文章はほとんど残されておらず、少年団員によるものを確認することができた。ただ、多くは出来事を記したものであり、それに対する自らの考えを述べたものは限られていた。なお、引用はいずれも原文のままである。

### 7-1. ルークスアとの友好関係

日本の少年団がシャムに招待された理由は、ルークスアの日本への招待と同様、両者の友好親善であった。このことについて少年団員は、「十四州よりの代表ルクスワー（健児）とは、ジャンボリー（バンコク滞在中に行われたキャンプ大会一引用者）中恰も我が国に於て、我等が常に兄弟及び親友と交る様にお互が心から打解けて語り合ひ、あるひは手と手を連らねて散歩せし事は連日の様で、シャム国民の親しい眼は何となく私共を打解ける様に感じました。」と述べている<sup>35)</sup>。また、「未来の暹羅、若き暹羅、東洋唯二つの独立君主国彼と吾、今後共に長く手と手を握りはわすべきではないか。」と述べている者もいる<sup>36)</sup>。

ルークスアと少年団員が、時間を共有し、語る機会を持ったことによって、相互の理解が進み、「打解け」たのであろう。また、その関係は、ルークスアと少年団員の間だけではなく、ひろくシャム国民とのものであったことも述べている。これはちょうど、日本を訪問したルークスアが日本国民から歓迎されていたことにも対応している。

### 7-2. 遺跡訪問

少年団はロップリーやアユタヤの遺跡を訪問しており、その感想を次のように述べている。「(1月8日一引用者) 十時五十四分ロップリー着、千六百七十年ばかり前の旧都、当時の王城が今は廢墟となつてゐるが、それを見ても当時の文明が相当に進んでゐたものであることを想像出来る。」「ロープリーの古都の跡、たゞるいゝとして黒くなつた半部つぶれた塔が、そびえ立つてゐる、顔のない仏像多く、アユチャー、かつて山田長政の武名をはせしアユチャー、今はたゞくだけた、廢墟累々たるものみにて当時の盛況がしのばれる、ビルマ軍にせめやぶられ、数百年重ね完成した仏典はやかれ、美しい寺院殿堂もことゝくはかいされた当時の悲惨な跡を顧みて感慨無量であつた。」などである<sup>37)</sup>。

ロップリーはクメール王朝やアユタヤ王朝の支配を受けるなどの歴史を持つ古い町であり、遺跡も多く残っている。また、アユタヤ王朝の中心地アユタヤはビルマ軍に攻められたときの破壊の様子を今に伝えている。これらを見学することで、昔日のシャムにおける文化の高さと、異民族に支配されることの意味を、少年団員は感じていたようである。

### 7-3. 山田長政

上記のアユタヤを訪問した際、少年団員は1600年代にアユタヤで活躍したとされる山田長政にまつわる土地を訪問している。その時の様子を以下の様に記録してい

る。「(1月9日一引用者) アユウチャは現在の首都バンユツクの前の首府だつた所、当時の王城、寺院が廢墟になつて残つてゐる、大きな大仏が其中に拝される、博物館には山田長政の絵巻物が遺つてゐる。(中略) 川を下つて日本村を訪ふ、此所が、我山田長政が三百年の昔、此国に渡つてアユウチャ王朝に仕え、時の動乱を鎮めた功により、国王より賜はつた屋敷跡のある所。我一行の為め村では特に新しい竹の棧橋を造り村長さんが出迎へて呉れる。」というものである<sup>38)</sup>。

シャムを訪問した当時から、アユタヤで山田長政が活躍していたという言説が、日本とシャムの両国にあったことが、その背景にある<sup>39)</sup>。先にルークスアが日本を訪問した際にも、日本側の挨拶に300年来の日本とシャムの関係があることを述べていたのは、まさにこの山田長政を念頭に置いてのことであろう。シャム側としては、日本を招待するに当たって、両国の関係の歴史を示す存在としての山田長政は看過できなかつたと考えられる。だからこそ、アユタヤ観光の際にわざわざ市街地から離れた旧日本人街にある山田長政の遺跡を訪問させたのである。

### 7-4. 仏教

団員の1名は、以下の様にシャムの寺院や仏教について述べている<sup>40)</sup>。なお、文中の「/」は原文において改行していることを示している。

暹羅人の総ては何所の寺院にても同じ方法の礼をなし、同じ様に仏教を崇拜してゐるのを見た。(中略) 唯一つの良い方法にて、一切衆生を救ふとか言ふ、宗教の根本から考へると、学ぶ箇所が有るのではなからうか。/ (中略) お坊さんも皆同じ黄衣を身に纏ひて、同じ様な口調でお説教して下さるのだ。夜営中は毎夜暹羅少年団の読経が有つたが、全国十四州から集つた、健児総てのお経は一致してゐたのだ。(中略) / 普通する挨拶も、同じ様に合掌するのだ。其の外拳闘の如き勝負事を為す場合にも、仏様に礼拝してから行ふのだ。之等総ては、暹羅の礼式が仏教に基いて、統一されてゐる事を証明してゐる。日本にては一旦緩急の場合は国民一致をする、それは古より国家的伝統的な団結心であり、日本の美德なのである。之に比して暹羅にては仏教が徹底してゐる為に、仏教の力に依つて国民一致を為してゐるのだ。そして暹羅を保つてゐるのだ。

日本の様な宗派による作法や經典の違いを、シャムでは見ることがなかつたようである<sup>41)</sup>。あるいは、両手を合わせる合掌という儀式を、普段の挨拶や勝負事の前に



も行うことについて、仏教に基づいた礼式がシャムに普及していることを踏まえ、仏教に基づく「国民一致」を見出している。

### 7-5. 街の印象

以上の他にも、「盤谷（バンコク—引用者）の市街はなかへ立派だ、しかし商人は殆んど支那人と云つていゝ位、支那人が沢山入込んでゐる。」といった印象や<sup>42)</sup>、「バンパインの離宮拝観、支那式、フランス式の建物だ、其中に日本の富士、三保の額がかゝつてゐるのは嬉しい、」といった、思わぬ場所における日本の登場を記録している<sup>43)</sup>。シャムへの出発前には、シャムの寄港や衛生状態を心配するほど、いわば「未開の地」という印象が少年団員にあったことは想像に難くない。ところが、訪問して街が「立派」であること、あるいはバンパイン宮殿に日本を発見することは驚きだったのである<sup>44)</sup>。

## 8. 相互の挨拶に見る両国の関係

### 8-1. 訪日したルークシアの挨拶

『講演記録』においてルワン・サナーポッチャナパークは、訪日期間中に挨拶をする際、日本とシャムの関係について、以下のように話したことを報告している。

両国には、3つの類似点があります。同じアジアの中の独立国であること、共に仏教を信仰していること、同様に国家を統治する王様を戴いていることです。これらのことによって、2カ国はとても親しくすることができるのです。以上の話によって、彼らはとても満足すると思います。

シャムを代表する立場として、独立国、仏教、国王の3つをキーワードにして類似点を提示している。次で述べる日本側のスピーチのように、山田長政を想起させる歴史的な観点についての言及はなかったようである。

### 8-2. ルークシアを受け入れた日本側の挨拶

ルワン・サナーポッチャナパークは面会した日本の役人や少年団関係者による、ルークシアに対する挨拶の内容がほとんど同じであったと以下の通り述べている（『報告文』）。

暹羅と日本の関係、両者は300年にわたって親しい関係にある、暹羅と日本の特徴は、国王がいて、チャート（おおよそ英語の nation に相当する言葉—引用者）が自由である、仏教を信仰している、親

密な友人である、だから、ルークシアの間に友愛の感情を喚起することはこれからの両国にとって重要である。それが、両国の商業にとって、そして繁栄にとって、役に立つだろう。それはアジア地域での発達となり、ヨーロッパ内の大国や米国に肩を並べることになるだろう。最後に、日本の企業を見聞きする機会をルークシアに与えるので、地元に戻ったら友人たちに伝えて下さいと付け加えることが多かった。暹羅のルークシアも答礼をして、見聞きしたことを全て地元で話すことを約束した。そして、両国の人民の間に関係や発展を期待して、将来にわたってよりよいものになることを期待する（と述べていた—引用者）。

ルークシアを迎える日本側は歓迎などの挨拶において、日本とシャムが親密な関係にあることを強調するために、歴史、国王、仏教などに触れていることを指摘している。さらに、両国の友好関係が、欧米への対抗を念頭に両国の発展に繋がるという将来構想にまで触れていたという。

### 8-3. シャムを訪問した少年団の挨拶

シャムを訪問した少年団の団長だった二荒芳徳は、シャムを離れるに当たってシャムの国王と国民に対する「御挨拶」をシャムの各新聞に掲載した<sup>45)</sup>。ここには、シャムを訪問して得た印象を3つ指摘している。則ち、「上下各階級を通じて一つの目的……世界の健児（少年団員のこと—引用者）は兄弟なりと云ふ大理想に集る少年団の大運動を見た」こと、「各所の寺院に詣でて壯麗目を眩する殿堂とこれ又上下階級を通じて仏にひれ伏す敬虔な国民を見た」こと、そして、シャムの宮廷舞踊である「コーン」とそれを大衆向けにアレンジした「ラコーン」を見て、「東洋音楽の至微玄妙な特異性のあることを知」ったことである。ルークシアと少年団の友好関係、仏教、伝統芸能について触れている。

シャム側は少年団を招聘するに当たって、ジャンボリーへの参加と、それを含めた子どもたちや両国の相互交歓を目的としていたが、それ以外にもシャムにおける文化や伝統に触れる機会を設定していたのであり、そのことを二荒も好意的に受け止めていた。

## 9. おわりに

ルークシアが日本に来た1929（昭和4）年や、少年団がシャムを訪問した1931（昭和6）年前後、日本とシャムはどのような関係だったのだろうか。両国は1887（明治20）年に「修好通商二関スル日本国暹羅国

間ノ宣言」を調印した。これによって本格的に外交関係が始まった。1896（明治29）年に日本はシヤムに公使館を設置し、2年後に「日本暹羅修好通商条約航海条約」を締結した。1926（大正15）年にはバンコクに日本人学校が開校した。1927（昭和2）年、本稿でも登場した大倉喜七郎が設立し、大山周三が所属した暹羅協会が東京に設立される。そして1928（昭和3）年、中国で発生した済南事件を契機に、シヤムの華僑が日貨排斥運動を起こした。

また、相互訪問後の1931（昭和6）年9月には柳条湖事件が発生した。そして満州事変や満州国に関するリットン調査団の報告書に基づく「中日紛争に関する国際連盟特別総会報告書」についての同意確認の投票が1933（昭和8）年に行われ、シヤムは棄権した。シヤムは日本との良好な関係を維持したいと考えながらも、国内の中国系住民を無視できなかった。その結果、投票においては中立を主張する意味を込めて棄権したのである<sup>46)</sup>。

日本の少年団がシヤムを招待した背景には、両国の親善友好の発展という考えと<sup>47)</sup>、暹羅協会の発足、暹羅協会理事長の大倉喜七郎の存在があった。大倉の資金提供によってルークスアを招待し、シヤムは国王の資金提供によって少年団を招待した。これらのことで実現した相互訪問を通して、両者は交流と理解を深め、さらにそれぞれの都市や遺跡、宗教施設、皇室（王室）関係施設などの訪問によって、文化や習俗の理解を深めることができたのは、本稿で引用したルークスアの引率者ルアン・サナーポッチャナパークの文章や、少年団員の感想文から明らかである。

本稿を通して、少年団とルークスアが、相互の交流や友好親善について共に前進したとの認識を共有していたことを確認した。また、少年団はルークスアを日本に招待するにあたって、都市の工場や軍事施設、宗教施設、その他の観光地への訪問を予定し、これらにおいて従来の文化を保存しながらも、近代国家として発展している姿を見学させようとした。そのことをルークスアも受け止め、商工業の発達に目を見張っていた。一方で、シヤムを訪問した少年団は、特に王室関連施設や寺院、遺跡を見学することによってシヤムの文化を経験し、また、山田長政をキーワードにして、日本とシヤムの歴史的なつながりを体験的に感じていたのであろう。

これら相互訪問には、本節の冒頭で指摘したような中国を巡る国際的な事情はほとんど反映されていなかったようである。その証左に、本稿で検討した公文書には中国との関係や国際事情に配慮するなどの文言を見つけることができなかった。さらに、既に圓入が発表しているように、1934（昭和9）年には日本の海洋少年団の練

習船が東南アジア一周航海の途中、シヤムに寄港した。さらに1935（昭和10）年にルークスアは少年団に対する親善友好の証として象を2頭、寄贈した。1937（昭和12）年には象の返礼として少年団の一行がシヤムを訪問し、これをきっかけに同年中にはルークスアの指導者が来日して少年団の指導者訓練を受けた。1934（昭和9）年と1937（昭和12）年の少年団のシヤム訪問においても、本稿で検討したものと同じく、バンコクとアユタヤの見学が主であり、道中各地で地元のルークスアの歓待を受けていた。

この後、1938（昭和13）年までにルークスアは青少年の軍事組織へと改組され、少年団も1941（昭和16）年には男女青少年団の統合に参加して大日本青少年団の一組織に位置づけられるようになった。戦時体制に移行することによって、それぞれの友好親善や相互交流が図られる機会は設定されなくなった。

日本の少年団の歴史的な研究は進みつつあるが、本稿で検討したシヤムのルークスアの歴史的な研究は、タイにおいてもほとんど進んでいない。本稿に続いて、国家の一組織であるルークスアの組織や制度、指導体制などに関する歴史的な研究に取り組みたい。

なお、本研究は JSPS 科研費21730659の助成を受けたものである。

- 1) 孫佳茹「中華民国時期における日中ボーイスカウトの国際交流に関する一考察 上海南洋大学童子軍の日本訪問に焦点をあてて」早稲田大学教育総合研究所『早稲田教育評論』28(1), 2014, 135-146。
- 2) このとき受け入れた米国サクラメントのボーイスカウト39名のうち、36名が日系人で、残る3名はイタリア系であった。指導者にも日本人が含まれていた（「両国少年団の来訪」『少年団研究』6(7), 1929, 44-45)。
- 3) 圓入智仁「1935年にシヤムから来日した象の受け入れ 少年団日本連盟と上野動物園・天王寺動物園の対応」『日本社会教育学会紀要』49(1), 2013, 11-20。圓入智仁「1935年にシヤムが日本に象を贈った経緯と目的 ボーイスカウトにおける国際交流の一事例」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』46, 2014, 59-69。
- 4) 日本語では、石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』（講談社、1987）、村嶋英治『ピブーン』（岩波書店、1996）、矢田部厚彦「1930年代日本外交の屈折 日・タイ関係史の一断面 第2回 友邦シヤムに訪れた革命の波」『外交フォーラム』15(10), 2002, 88-95)がある。
- 5) 西野順治郎『増補新版 日・タイ四百年史』時事通信社、1984, 86。
- 6) From Phya Subarn Sompati, To Viscount M. Mishima,

- February 27, 1929. Roo 7, Boo 7, 31. これ以前にも、ルークスアは少年団日本連盟に年次報告書を送っていたようである（「シヤムの少年団 総裁は皇帝陛下」東京連合少年団『ジャンボリー』2(5), 1923, 9)。
- 7) From M. Mishima, To Phya Subarn Sompati, March 4, 1929. Roo 7, Boo 7, 31. 二荒からの礼状も同じ文書に綴られている。
- 8) The Siamese Legation, Tokio, Thii 1429, 1.3.2471, Roo 7, Boo 7, 27.
- 9) Thiithamkaan Uppanaayok Saphaakammakaanklaang Chatkaan Luuksua Haeng Sayaam Krasuwang Thammakaan, Thii 1883, 27.3.2471, Roo 7, Boo 7, 31. なお、7世王はシヤムの学校の授業日程を気にしていたという。
- 10) Siamese Legation, Tokyo, Thii 246/1491, 26.3.2471, Koo Too. 83, 6. このことについても公使館からシヤムの外務省、そしてルークスアを所管する同国文部省へと連絡が行き、4月23日付けで文部省が外務省に受諾の返事を行っている（Krasuwang Thammakaan, Thii 1/594, 23.4.2472, Koo Too. 83, 6.）。ただ、国王秘書局はこの訪問が成功するかどうか、不安視していた（Kromraachaleekhaathikaan, Thii 170, 10.4.2472, Roo 7, Boo 7, 31.）。
- 11) 「暹羅少年団招待状」『少年団研究』6(9), 1929, 44-45.
- 12) 三島通陽「暹羅協会以来の思出」財団法人日本タイ協会『財団法人日本タイ協会々報』31, 1942, 13-14.
- 13) その一方で、ルークスアは費用の負担者が大倉喜七郎だと把握していた。Nairuang Luuksua Sayaam Phai Phratheet Yiipun, *Luuksuasayaam*, 7(11), B.E.2472(A.D.1929), 192-197.
- 14) 「暹羅少年団ヨリ象寄贈越ノ件（十、一、十）」、本邦各国間贈答関係雑件3巻・4巻、外務省記録・L門（元首、皇室、賞勲、表彰、儀礼、贈答）・4類（贈答）。
- 15) 吉田千之輔「戦前の協会会報『解題』編集こぼれ話 第1回 昭和2年『暹羅協会』設立当時の会員名簿」日本タイ協会『タイ国情報』46(3), 2012, 95. 大倉喜七郎がシヤムに関わり、暹羅協会を設立した経緯については、南原真「大倉喜七郎男爵と『暹羅協会』の創設」（村嶋英治・吉田千之輔編『戦前の財団法人日本タイ協会会報集成解題』早稲田大学アジア太平洋研究センター研究資料シリーズNo.4, 2013, 10-28）に詳しい。
- 16) 大山周三「来訪する暹羅少年団」『少年団研究』6(8), 1929, 39.
- 17) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012428500（第2-3画像目）、各国少年団及青年団関係雑件 第一巻（I.1.10）（外務省外交資料館）。同じ公文書は、「暹羅国に於ける新聞記事の情報」（『少年団研究』6(9), 1929, 45）にもある。
- 18) JACAR:B04012428500（第4-5画像目）、（同上）。ルワン・サナーポッチャナパークが1か月程度、日本で延長して滞在する目的は、製造業や商業の視察であり、そのための費用は文部省が負担するとのことだった（Krasuwang Thammakaan, Thii 16/3758, 1.7.2472, Koo Too. 83, 6.）。実際には、職業教育の視察が目的であったが、訪日の期間は日本の学校が夏休みに入っており、期待通りにならないかも知れないと在暹羅日本公使館はシヤムの文部大臣に連絡している（From Imperial Japanese Legation, Bangkok, Siam, To H. H. Prince Dhani Nivat, Minister of Public Instruction, Bangkok, 26th June, 1929, Soo Too. 36, 112.）。後に、ルワン・サナーポッチャナパークの日本滞在延長期間は、1週間程度となった（From Ministry of Public Instruction, Bangkok, Siam, To Baron Okura, July 9, 1929, Soo Thoo. 36, 112.）。なお、ルワン・サナーポッチャナパークが校長を務めていた工芸美術学校にはルークスアの組織がないため、彼にはルークスア中央委員会副委員長の役職を与えることになった（Thiithamkaan Uppanaayok Saphaakammakaanklaang Chatkaan Luuksua Haeng Sayaam Krasuwang Thammakaan, Thii 431, 17.6.2472, Roo 7, Boo 7, 31.）。
- 19) Krasuwang Thammakaan, Thii 16/3758, 1.7.2472, Koo Too. 83, 6.
- 20) Kaan Raproong Luuksua Yiipun, Roo 7, Boo 7, 35.
- 21) JACAR:B04012428500（第6-7画像目）、（前出）。
- 22) Yoonangsuuphaneek Taangphratheet Thii 225/2672, 20.5.2472, Roo 7, Boo 7, 31.
- 23) From Phya Subarn Sompati, To Count Yoshinori Futara, No.308, June 27, 1929, Koo Too. 83, 6.
- 24) JACAR:B04012429900（第24画像目）、各国少年団及青年団関係雑件 第一巻（I.1.10）（外務省外交資料館）。
- 25) From Ministry of Public Instruction, Bangkok, Siam, To Baron Okura, July 9, 1929, Soo Thoo. 36, 112.
- 26) Raaigaan Prachumaphirathamontrii Khrang Thii 10/2472, 12.7.2472, Roo 7, Boo 7, 35.
- 27) JACAR:B04012429900（第2-7画像目）、（前出）。「国際情報」『少年団研究』7(9), 1930, 44-45.
- 28) JACAR:B04012429900（第13-15画像目）、（同上）。
- 29) JACAR:B04012429900（第20-22画像目）、（同上）。
- 30) 白井茂安「南国の若人達を迎へて 暹羅少年団訪日旅行日記」『少年団研究』6(11), 1929, 17-22.
- 31) Raaikaanphiseet Haeng Kaan Chumnum Luuksua Haeng Chaat Khrang Thii Soong, *Luuksuasayaam*, 9(4), B.E.2474(A.D.1931), 225-240.
- 32) この表は、第4節「相互訪問の経過」における引用文献と、高木文吉「シヤム派遣団日記」（『少年団研究』8(4), 1931, 23）に基づいて作成した。なお、訪問場所の分類は筆者によるものである。また、地方自治体を対象としていないのは、相互訪問において訪問地の首長とはほぼ例外なく面会

しているためである。ルワン・サナーポッチャナパークは、帰国後の報告文において訪問場所を以下の様に分類している (Nairuang Luuksua Sayaam Phai Phratheet Yiipun, *op. cit.*, 192-197.)。

- (1) 重要訪問人物 知事, 省長, 大臣
- (2) 少年団の集会, 地方事務所, 後藤初代総長の墓
- (3) 商業, 手工業, 工業の見学
- (4) 国家機関の見学 郵便・電信・電話・ラジオ局, 戦艦造船, 海軍基地
- (5) 尊敬や信仰の場 皇居, 新聞印刷所 (国民の代弁者), お寺, 神社
- (6) 見事な場所 皇居, 公園, 丘, 山, 古代遺品
- (7) 娯楽 野球, 演劇映画, 湖や海での水浴び, 乗船

33) Nairuang Luuksua Sayaam Phai Phratheet Yiipun, *op. cit.*, 192-197.

34) Luuksua Phai Yiipun, *Witthayaacaan*, 30(8), B.E.2473(A. D.1930), 565-600. Phra Sanaaphotchanaphaak, *Paathakathaa Ruang Luuksua Phai Yiipun*, B.E.2476(A. D.1933). Nairuang Luuksua Sayaam Phai Phratheet Yiipun, *op. cit.*, 192-197.

35) 増田信良「シヤム訪問感想」『少年団研究』8(4), 1931, 54-55。

36) 林道春「旅行日記より」『少年団研究』8(4), 1931, 52。

37) 水谷順治「シヤムに使用して」『少年団研究』8(4), 1931, 55-56。

38) 高木「シヤム派遣団日記」(前出), 23。

39) 山田長政がアユタヤに実在したのか, 学術的には裏付けがない (矢野暢「山田長政は実在したか」毎日新聞, 1987.3.4朝刊記事)。ただ, 当時から日本とシヤムをつなぐ歴史的な人物として認知されていたようである (土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」早稲田大学アジア太平洋研究センター出版・編集委員会『アジア太平洋討究』5, 2003, 97-125)。

40) 安田正一「暹羅と仏教」『少年団研究』8(4), 1931, 54。

41) シヤムの仏教にもタマユットニカーイト, マハーニカーイトという宗派がある。

42) 高木「シヤム派遣団日記」(前出), 23。

43) 同上, 23。

44) この絵が以前からあったのか, 少年団訪問の際に臨時に飾られたのかは不明である。

45) 「シヤム国王室及び国民に対する御挨拶」『少年団研究』8(4), 1931, 11。

46) 石井ら『日・タイ交流六〇〇年史』(前出), 251。

47) 「少年団を通して増進されたる日暹関係」『少年団研究』8(4), 1931, 9。